

# 非言語表現の意味作用：異文化適応教育の構成要因として

(研究プロジェクト「異文化適応教育の充実」成果集3)

丸井 一郎

(人文学部国際社会コミュニケーション学科)

Signifikation der nicht verbalen Ausdrucksmittel:  
als Bestandteil interkultureller Didaktik  
Signification of non verbal expressions:  
as didactical component for intercultural ability

Ichiro MARUI

(Department of International Studies, Faculty of Humanities and Economics)

## 1. はじめに<sup>(注1)</sup>

この論文は、奥村訓代の実践報告「信州大学との異文化間交流記録」(=奥村2001)と共に、表題に示された研究プロジェクトの成果をなす。プロジェクトは1999年度及び2000年度高知大学教育改善推進費(学長裁量経費)の助成を受けた。2000年度の成果集の第一集には「異文化適応と言語教育」と題されたシンポジウムの実施報告及び関連の寄稿論文を取録している(以下「シンポ報告」とする)。この報告と前年度の成果である共著論文「異文化性と教授方策：非言語表現を素材に」(=丸井他2000)、及び単著論文「異文化適応教育の諸前提(研究プロジェクト「異文化適応教育の充実」成果集2)」(=丸井2001)が本論考の背景をなす。研究プロジェクトの概要についてはそれらを参照されたい。

これらの研究では大別して異文化適応教育の実践及び理論的諸問題の解明を試みた。実践面は奥村の報告等を参照されたい。本論考の課題領域は、主として対面談話の相互行為に現れる様々な言語・非言語表現の異文化性である。上記の論文(丸井2001)で論じたように、異文化適応能力の教授・学習の大前提は、異文化性自体の認知と自覚・対象化である。対面談話に類出する一見目立たない表現、とりわけ非言語表現は中でも対象化が困難な領域をなす。およそ教授法的な取り扱いを試みる前に、対象自体の詳細な調査と定位が不可欠である。

## 2. 問題とそのコンテクスト

先行論文(丸井2001)でも述べたように、建築や飲食文化なども異文化体験の一部をなすが、本論文で取り扱うのは主として言語相互行為としての対面談話(対話、会話)の領域である。言語相互行為としての対面談話の研究は(非)言語的表現形式の意味作用の側面と行為の出来事としての側面の両者を個々にまた相互に関連づけて解明する。対面談話における意味作用は大別して3つの領域で対象化される。記号言語表現(音韻、語彙、文法等)、身体表現(身振り手振り、表情等)及び音声表現(談話のプロソディ等)である。意味作用に関与する言語的・非言語的表現は程度の

差はあれ記号的な形成体である。いわゆる分節恣意性・非連続性（デジタルな性質）によって特性化されるのが記号の体系としての言語（記号言語）であり、その他の2領域はこれに対して恣意性・非連続性が顕著でなく隣接・直示的、類似・模倣的、連続的な性質で特徴づけられる。

先の研究（丸井他2000）では現実の相互行為の状況中で観察される非言語表現ではなく、意図的再現のために設定された記録状況で主として視覚的身体表現（典型的にはいわゆる「ジェスチャー」）を収集しその基本的な特徴を解明した。そこでも注記したが、非言語表現の意味作用のスペクトルは明示的身体表現の領域に限定されない。実際の進行しつつある相互行為状況の中で、（非）明示的な体勢などの身体表現、音色など音声表現そして言語表現の総体から、どのようにして参加者がそのように理解する意味が産出されるかを解明することが課題である。なぜなら異文化間の交流、特に対面談話状況で感受される説明しがたい違和感の多くは当事者達自身が自覚していない意味作用の微細な仕組みの差異によることが知られているからである（Gumperz 1982）。

この微細な意味作用は言語表現領域に限られず、常にではないが、他の2領域での差異の方がより自覚されにくい。そういった非明示的で連続的な性質の表現は、より明瞭な図柄としての言語表現の地下として機能するだけでなく、独自の意味の次元を有する。例えば上記「シンポ報告」所収のライネルト論文にもあるように、外国語の授業中に英語やドイツ語を母語とする教師に話しかけられた日本人学生が、何の発話もせず、およそ反応をしないように見えるが、実は椅子の上の正座とも呼ぶべき緊張した体勢を維持して、ある種の「恭順の意」や「わかまえ」と「意識の集中」を表していることがある。これに欧米出身の外国人教師達は全く気づかない。むしろ拒絶と見なす。また当の学生が周囲の仲間と相談しながら答えを出そうと努力する様を見せる場合も、教師との相互行為自体の放棄であるとして、同じく劣悪な評価を受ける。これらは始めと終わりを厳密に確定できるほど明示的な非連続記号ではない。しかし例えば前者の場合、体勢として、また居ずまい・態度として、記号的に理解可能な程度には固定している。この問題を初めて相互行為分析の視点から論じたライネルトの初期の論文（Reinelt 1987）に対して、「なるほどそうか、おかげで私は日本人学生を馬鹿にしなくて済むようになった」という主旨の感謝と評価の反応が多数寄せられたことにも問題の重要性が察せられる。逆に、例えばヨーロッパ諸語の話者に言われる「大げさな身振り」は、単なる「感情表現」や付け足しではない。発話表現のある部分を強調する焦点化や、「これは皮肉だぞ」というシグナル、目下発言中の相手への異議の予告、発言順の要求など談話の組み立てに対して独自の意味を持つことを、同じ記号システムを有しない学習者は、まず受動的に理解できるように、さらに進んでは模倣的再現が可能な程度に習得しなければならない。

音声表現についても事情は同じである。例えば、英語やドイツ語は音声の種類（音色の変異）が多いだけでなく（これも違和の原因）、日本語の日常発話の様々なスタイルに比べて使用される音域が広くリズムの変異も大きい。簡略に言うと、地声から裏声までの音高の変化、最早聴取できないほどの音声単位のリズム的圧縮が通例である。丸井2001でも論及したが、音声への違和感は異言語習得が異文化適応へと導かれる途上で大きな問題となる。身体表現以上に音声表現は話者の「内声」を伝える。教師の側で克服されていない対象言語の音声への違和も同じく学習者の耳には隠せない。（むしろ隠す必要はない。）さらに、相互行為から見た音声表現の領域である談話のプロソディーは、狭義の言語表現とは別の意味作用体系をなし、身体表現と共に相互行為の構成に重要な機能を果たす。例えば、冗談か真面目か、演技的引用か直接言明か、など行為のモダリティを明示し、また進行中の発話の中で、その部分が言明本体に属すのか、挿入的注釈なのかを標示する。

一般に言語・非言語表現は前理論的観点からは常に以下の3大アスペクトの統一体である。

- ① 社会行動
- ② 生理心理過程

### ③ 記号体系・記号形成体

意味の総体は最終的には間主体的に了解された社会行動としての意味である。始めと終わりが確定できる一単位の（言語）相互行為は特有に構成される社会行動の一単位でもある。これが（非）言語表現の意味の母体である。身体表現や音声表現（談話のプロソディ）の研究の大前提として、それらが独自の意味システムであること、またその他の諸前提として、できるだけ現実の談話事象を研究対象とし、常に社会行動のコンテクスト（相互行為類型、相互行為枠）を考慮すること、及び個々の表現のコンテクスト（前後の発言・行為）を考慮することが挙げられる。いわゆる「ノンヴァーバルコミュニケーション」という名でかつて称揚された研究領域は、近年では言語表現との一体的理解の内で止揚され、むしろそれをも含めて、相互行為としての談話行為の組織全体を研究することが重要であると理解されている（Streeck/Knapp 1992）。

## 3. 談話における言語・非言語表現の機能的統一：モデル分析

### 3.1. 談話組織と参加様態の理論

時間的に展開する談話の組立のことを談話組織とする。談話組織には行為組織と話題組織の二つの側面がある。従来は主として話題組織の側面が注目されていた。一方で相互行為としての談話には、言語によって媒介される情報の側面だけではなく、人間が共にいて、共通の出来事に同時に参加しているという側面がある。これについては、その出来事を始動し、開始したことを互いが確認し合い、接触が保持されるよう意を用い、話し続けるよう相手を促し、自分の発言順が受け入れられるよう準備し、まだ話続ける意向であることを分らせ、何らかの区切りがついたことを確認し合い、終わりが近いことをほのめかし、終わりを始め、実際に終わる、等などの活動が含まれる。この独特に組織された行為には、共通の出来事に同時に参加し（同時性）、かつ短期間の例外状態は別として、その出来事は参加者が交互に、つまり一時には一方のみがより多く貢献することで成り立つ（交互性）という性格が見られる。これは言語的相互行為としての談話における形式的協調、争うためにも成立していなければならない協調の基本類型の具体的な現れである。

表現上では話題関連的な発言であっても、行為組織上の機能から見るとより良く理解されるものがある。特に日本語の談話にしばしば出現する「自明事についての質問」は、談話の流れを保持する（「間を持たす」）、相手に発言順を譲り、発言を促す（「水を向ける」）、或はより基本的に、個別文化的に特定の意味での協調（「挨拶」「ヨロシク行動」）への用意を表明するといった行為組織上の機能が顕著である。この種類の質問行為が類似の行為組織機能を持たない文化を背景とする場面で発せられると異文化間の誤解の原因となる。

独・英・日の対照で興味深いのは、行為組織において独自の機能を果たす特定の表現形式の発達と使用頻度の差異である。欧米の言語と比べて、日本語に遥かに多様に存在し、また高頻度で用いられる参加者間の相互指向表現の談話における実際の使用を観察する必要がある。これらの表現には、「うん」などの音声表現のほか、話し手の発話単位の終結部分では主として終末助詞（ね、な、さ、よ、等）、母音の引き延ばしを伴う上昇調、疑問形（でしょ、じゃろ、等）、また聞き手から発せられる不変化詞や間投詞、あるいはまた定型化した常用句（Routine formel, routine formula「そうですね」等）などが見られる。特に終末助詞の多用とそれに応じて相手側が同調する現象は、英語やドイツ語資料には比較的稀である。従来の「相づちや」あるいは「back channel」等の用語では、他言語文化との対比でこういった日本語表現が有する談話行為上の多様な機能を十分に伝えられない。発言順に関わる交互性からだけでなく、共同参加に関わる同時性からも、これら表現及

びより不明瞭な音声表現の機能を解明することが重要である。この点についての考察と提案は大浜2001に詳しい。この機能が明確な「ね」「うん」などの簡潔な常用句は、参加者間相互の関連づけに関わる音声表現としての談話信号 (discourse marker) とも言えるだろう (Schiffrin 1987)。

参加役割、特に相互行為の当事者性の談話における現れに関しては、まずはサックスら (Sacks et al. 1974) の話者交替システムに関する研究によって、技術的側面から分析された。彼らの基本的な話し手と聞き手の区別から出発して、この現象はより一般的に談話における物語手、語り手、聞き手、注釈者といった参加役割の変異として論究されてきた。

英国における日常的歓談 (small talks) の資料をもとに、ドイツの英語学者ブーブリツ (Bublitz 1989) はさらに主話者、副話者、聞き手という基本的三分割を提起した。彼は話題の取り扱いにおける貢献の違いから、あるまとまった期間実質的な内容のある発言で話題を様々に処理し終結へと導くのを主話者、それに対して注釈や補完の発言をするのを副話者、上記二者との対比で、相手に発言権のあることや聴取が正常に行なわれていることを確認する合図 (Hörersignale/back channels, hearer signals) を発するのみである者を聞き手とする。シュヴィタラ (Schwitalla 1993) はこれをさらに発展させ、実際に行なわれた談話事例に即して、複数の話者による協同的な話題の取り扱いの幾つかの様態を識別した (コーラス発話、フーガ発話など)。

クヴァストホフ (Quasthoff 1990) は、医療の現場、個人的な相談等の談話における主話者の一方的な固定現象を、談話の類型に関わらず一般的に通用するとされる担当者性 (希有な体験の保持者、話題について知識が他より多い者、専門家等が有する) と責任性 (他人に助言する者は求めがあれば詳細に説明する義務を負う等) の原則によって説明することを提起した。

但しクヴァストホフの論は、少なくとも中部ヨーロッパではそうだと、ということである (オランダ語、ドイツ語などの資料が中心)。日本では、例えば、組織内の上位者が、その意味で外的に保証された発言権を行使して話題を主導することは、ただ単に彼/彼女が現在のところ「話者」或は「主話者」であるということだけでなく、場合によっては日本的な意味での上下協調における上からの世話役を演じていることでもありうる。この側面を無視しては、日本語の談話行為の全体像が適切に捉えられない。この観点から見ると、上記研究者らの提示する参加役割、ひいてはその背後にある参加様態の像は、彼らの属する集団の言語相互行為に特有の協調様式やある種の原則を自明の背景としていると言える。それはそれで単文化の研究としては妥当であるが、異文化の視点からは相対化が必要である。一見目立たない「普通の」対面談話への参加役割にさえ、文化間の差違が予測される。些細な身振り手振り、視線、声の調子などはこの関連で様々に異なる意味作用に結びついている。繰り返すが、この領域での微細な異文化性を認知・自覚し、さらに教授・習得可能にするには、事柄自体の解明が先決である。

### 3. 2. 事例の微細分析

#### 3. 2. 1. 始めに

分析する事例は、マンハイム在住の二人の日本人女性 (30歳代と40歳代) が、ドイツ文化センター主催のバス旅行の準備について、コーヒーを飲みながら雑談混じりに、打ち合わせをしている場面である。両者は上記センターの同一クラスでドイツ語を学習中であり、日常的に交際がある知人の関係である。少々古い記録資料 (1992年) であるが、今回のプロジェクトで電子資料化し、画像資料の提示が可能となった。出発の場所と時刻の話題の後で、宿泊つきの旅行のために食料をどうするかというのが当該部分の話題であり、合意達成の目標である。これが話題による区分からして一つの独立した局面をなしている。印象として極めて「普通の」「うちとけた」相談の談話事例であると見える。談話全体の転写はこの章の末尾にある。

以下の分析で注目するのは、相互行為としての対面談話の進行がどのように参加者によって刻々と支えられ作り出されるかという点である。この点で予示したいのは、両参加者は、やや異なった様態であるが、両者とも主話者であり協力者でもあるという役割を演じていることである。その全体としての印象は具体的にはどのように段階を追って作り出されるのだろうか。話題の導入、話題の展開、談話の局面とその転回、それらへの参加者の貢献の質と量について焦点を当てる。さらに行為の流れの中で言語、及び非言語表現はどのように全体の意味作用に結びつくだろうか。

### 3. 2. 2. 課題解決の側面から見た分析

この局面での対話全体は4つの小局面から成る。まず課題解決の共同作業という側面にだけ注目して話の流れを再構成する。同時に小局面を構成する連鎖の単位を確定する。当該部分全体の見通しを得るために、上の観点から話の内容を要約しよう。著名なドイツ西南地方「黒い森」への一泊旅行の際に食物をどうするか、という課題がある。現地のレストランなど外食の可能性については詳細が分からない。では出発前日に何か仕入れていこうというのが当面の解決策である。

<課題解決中心の再構成>

局面全体：課題の共同解決＝「一泊旅行の食事をどうするか」

小局面1：買い物をする、では何を買うか

連鎖1：買い物をするのであろう(B)→然り、だが時間がない、適当に買う(A)

連鎖2：例えばインスタントラーメン(A)→それは奇妙だ(B)

連鎖3：なるほど奇妙だ(A)(→以下課題解決への貢献無し)

小局面2：現地でも入手可、事前に購入もできる(繰り返しあるいは空転)

連鎖4：簡単な外食は可能であろう(A)→然り(B)

連鎖5：或いは簡便な食料を携行することも可(A)→然り(B)

小局面3：いつ用意するか、30日である

連鎖6：では出発前日の30日は授業が午前だけなので午後用意しよう(B/A)

小局面4：「コード(楽曲に言う意味で)」(＝課題解決への貢献無し)

連鎖7：では適当に、2日分だけ(A/B)

さらに全体を課題解決への貢献という論旨に添って縮約すると以下ようになる。

→ 談話の流れ →

論旨の主流	S 1 (買い物をするか)	S 6 (30日にする)
主流からの派生	S 2 (食品例示1)	S 4 (別案=外食) + S 5 (例示2)
派生からの二次派生	S 3 (例示への評価)	
局面全体への「コード」		S 7

### 3. 2. 3. 当該局面の全体的理解

上のように比較的論理的に再構成しやすい「課題解決」という骨組みだけにすると、共存在と相互行為の出来事としての談話全体の印象とはかなり違ったものになる事が分かる。この談話事象の社会的、間主体的、人格的意義はそれに尽きるわけでないことが理解される。では生きた体験としての談話事象を特徴づけるのはどのような性質なのだろうか。談話事象を、共に過ごす時間、共同で作り出す持続、共有された体験の観点から見ると、上の提示とは異なる像が見えてくる。これを確認するために、目的追求という制限された観点からでは「逸脱」するかのように見える(S 2→)

S 3 のやり取りにまず注目しよう。

この部分だけを漢字仮名交じり表記にして示す。

<転写テキスト1>

連鎖 「S2」 「S3」  
 A: #インスタントラーメンとか# ふふ インスタントラーメンも  
 B: うん ははは  
 #弱く

- S 3 -

A: 悲しいよねえ↑↓ せっかくねえ↑↓ 向こうへ行ってねえ↑↓  
 B: ふふ  
 # #  
 #両者微笑しながら見合う

S 3」

A: へへへ やあそりやちよつとねえ  
 B: ふふふふ 野菜持ってふふふ ラーメン作るんじゃねえ  
 # #  
 #互いの目を見る 笑いながら

上の転写テキストで用いられている記号の内、「↑↓」は比較的差の大きい高低型の音程変化を表し、相手への働きかけを強調し、参加者間の相互の「向かい合い」「相互性」を緊密化する。下でも述べるが、いわゆる「あいづち」のかなりの部分と同様に同時性を強調し、相互指向表現とも呼べる特徴を持つ。

この連鎖(S 3)に特徴的なことは、かの「黒い森」の宿に泊まるのにインスタントラーメンを持参するという思いつきの滑稽さを、一方的・否定的・攻撃的ではなく、共に楽しんでいるということである。話者Aは自分の思いつきのおかしさに相手の率直な笑いの表現で気づかされ、「インスタントラーメンも悲しいよねえ」という発話で「本題」とは異なる小局面を開始する。「ねえ」は明確な音程差の高低型イントネーションで、上に言及したように、相手への指向、相互の何らかの共有性、同時参加を意義関連とする始動的な性格の音声表現である。これに対してBは笑いの音声表現で応答する。ある箇所では、AがBの応答の笑いにさらに笑いで応答する(二重の応答=「三步形式」)。これらの連鎖が単に「自然な」感情の「自発的な」現れというだけでは十分でない。自覚の程度は別として、それなりにコントロールされた談話の進行であることは非常に精密に出入りする交互の実行の様態から見て取ることが出来る。(つまりこの精密さは文化集団によっては「当たり前」ではないことがありうる。)

さらに両者は純然たる記号言語の表現面でも特異な共同作業を行う。それは一つの統語単位を二

人が受け渡す形で完成させる現象である。Aが「せかくねえ、向こう行ってねえ」と始めると、笑いの連鎖をはさんで、Bは「野菜持って（中断）ラーメン作るんじゃねえ」と応じる。中断の部分には、Aがこの思いつきに対する評価として「やそりゃちょっとねえ」という表現を挿入している。この小局面冒頭の「悲しい」という評価表現に対応するものである。

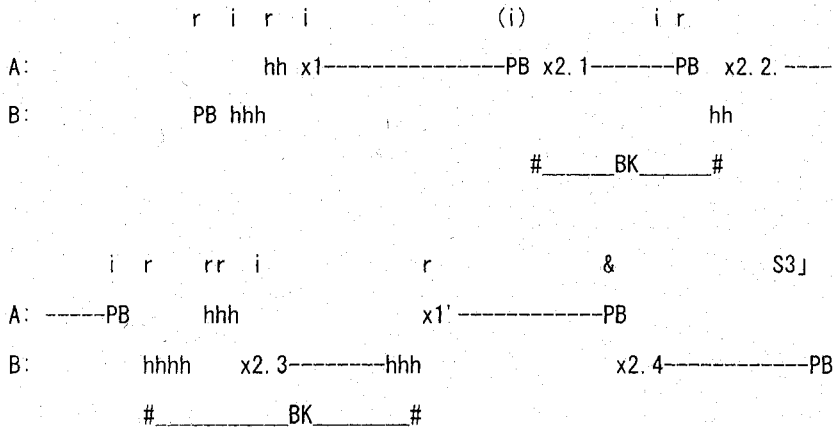
これら連鎖の全体は非常に緊密な織物のようである。両参加者はどちらかだけが「主たる話者」ではなく、共同で共有されるべき持続を、ひいては状況を作り出している。その際、純言語的には、一統語単位の共同作成、類似表現の繰り返し、音声表現としては特異な高低差の「相互指向表現」及び「笑い表現」の集中的な交互実行、視覚的表現としては一時的にのみ（これが重要）、互いに視線を相手に固定することなどが一つの全体として、この場面の意味産出に関わっている。この部分は、文化を共有する者にはさほど無理なく理解可能な友好的な場面だが、より多く「課題解決」に意義を置く文化に属する者には逸脱であろう。以下にそれら様々な領域の表現が織りなすアンサンブルを図式し、該当する映像記録の静止画像を示す。

図 1

略記法

- x1：特定内容の表現、x1'：x1と類似内容の別表現、
- x2.1/x2.2：上と別内容の表現の部分、x2.4で完成、---：その他の言語発話
- h：笑い、PB：相互指向表現、BK：視線の向け合い
- i：始動的、r：応答的、rr：応答に対して応答的、&：統合的

S2]「 S3



画像 1



画像 2



## 3. 2. 4. 話題処理と共同参加

この局面の最重要部は明らかに連鎖6のみからなる小局面3である。ここで買い出しの日時が合意決定される。非常に興味深いことに、「課題解決」の上からも帰結点である部分に共同参加の面でも極度に精密な交互のやり取りの織りなしが見られる。上で紹介した方法に従って、核心部分だけを示そう。資料の転写テキスト中の段組に拘わらず、ここでも該当する部分を漢字仮名交じりで再現する。

## &lt;転写テキスト2&gt;

A: ふんー 前の日は空いてるでしょ↑ 多分30日は  
 B: じゃ前の日にー↑↓前の日たぶんー ふんふん #午前中でしょ  
 #うなずく

A: ふん ふん ふん #x x# だからごごー用意しよか #ふん ね↑  
 B: どせやるとしても ゲーテの方 午後やりましょーか ふん ふんふん#  
 #「ふん」と同じリズムで #両者うなずく  
 うなずく

この連鎖では上の例以上に共同参加を作り出す言語・非言語表現の交互提示が顕著である。まず統語単位の共同作成は、Bの「前の日(たぶん)」を受けてAが「前の日はあいてるでしょ」と完成させ、すぐ次にAの「多分30日は」を受けてBが「午前中でしょどうせやるとしてもゲーテの方」と完成させる。また句や語彙単位のレベルでも多くの繰り返しが観察される。ほぼ純然たる繰り返しは「前の日に」「前の日」「前の日」、「たぶんー」「多分」、「ごごー」「午後」であり、類似句の繰り返しは「用意しよ」「やりましょー」である。(なお上の転写テキストでは音声表現の忠実な再現と同定の便宜のためわざと同一表現の表記を変えてある。)相互指向表限も濃密に出現する。下線部分が該当する。特に最後の密集したやり取りは非常に顕著な「同期化現象」である。

## &lt;転写テキスト2a&gt;

A: ふんー 前の日は空いてるでしょ↑ 多分30日は  
 B: じゃ前の日にー↑↓前の日たぶんー ふんふん 午前中でしょ  
 A: ふん ふん ふん #x x# だからごごー用意しよか #ふん ね↑  
 B: どせやるとしても ゲーテの方 午後やりましょーか ふん ふんふん#  
 #「ふん」と同じリズムで #うなずく



さらに身体的視覚的表現については、上の転写テキスト2に示したように「うなずき」が頻発しまた発話と同様にリズム化されている。これも同期化現象である。この部分では両者は終始視線を向け合っている。

ある発話が始動的であるか、つまり談話の流れに何らかの新しい動きを導入するか、応答的か、つまり始動の働きかけへの反応であるのかは参加役割の分布に影響を及ぼす。一般にこの談話事例では、両者が共に「主話者」であるが、個々の箇所には相対的な貢献の多寡がある。しかしこの部分の末尾では同期化が顕著で、個々の発話について始動的／応答的の区別が不可能である。よって統合的とした

以上の観察を図式する。

<図2>

略号のうち図1にないもの

"ww", "yyyy", "zzzz": 表現の繰り返し

c: 継続的（始動的、応答的に対して）＝統語単位の協同作成

i          i r i          c                          r i c

A:                  PB                  x1.1+1.2-----PB      ww-x2.1

B: RA-----PB      x1.1-ww                          PB                  x.2.2-PB

うなずく

r                          &          &                  & & &

A: PB PB PB #x x#\* ---yyyy zzzz-PB #PB PB #

B: x.2.3+2.4                          yyyy zzz-PB PB PB#

#うなずく+リズム化          #両者うなずく

画像3



全体としてこの第6連鎖であり第3小局面である部分は話題（課題：買い物をする→いつするか）が一定の帰結へと導かれ、一つのまとまりが形成される箇所であるが、同時に出来事として極めて濃密に共同参加、相互性が確認される。この両側面が一つの全体として、参加者がそのように理解し、第三者にも追体験可能な社会行動としての意味を産出する。談話の組織から見ると、同時性（共同参加）のために交互性（発言順の組織）が限界一杯と言えるほど活用されている。それが図2にあるような交互のやり取りの緻密な織物を出現させている。

上でも示唆したが、このように精緻な共同発話の現象は文化ごとに異なった出現の分布様態をな

しているらしい。我々にはなじみの現象であるが、別の類似した共同発話の事例を紹介されたあるドイツ人研究者は「器楽のアンサンブルにおけるフレーズの受け渡しのようなものである」という感想を述べた。

最後に、「コーダ」の部分 (SP4=S7) は声量も小さく、言語表現、笑いの音声表現など個々の発話が互いに関連づけられていない。集中の後の拡散現象が観察される。話題の終結や交替を明示する標識が示されないこともこのタイプの日本語談話の特色であることを付記する。

談話資料 (区分つき転写テキスト: JG9の一部)

「SP1

「S1

1)

1

2

A:

toka ittetakedo mo= zikanga naikara

B: de okaimonotoka surundesyo= nanka(...)ne↑↓

不明

—SP1—

-S1

S1」「S2

2)

(1)

2

3

A: tekito=ni katte motte ittara dookasiranee↑↓ hn #insutantoraamentoka#

B: syokuryo=o↑

Aうなずく

#弱く

—SP1—

S2」「S3

3)

1 L1

L2 2

L3

A: hh insutantoraamenmo kanasiiyonee↑↓ sekkakunee↑↓ mukooe

B: hn hahaha

hh

笑う

#

笑う #

笑う

#両者微笑しながら見合う

- S P 1 S P 1」  
 -S3 S3」  
 4)  
 (1) L1 L2 2(=L3) 3 4(=L4)  
 AA: ittenee↑↓ # hehehe #yaa sorya tyotonee  
 BB: #hhh yasai motte hhh# ra=mentukurunzyanee  
 #互いの目を見る  
 笑う 笑う 笑いながら

「 S P 2 S4」  
 「S4 S4」  
 5) 1 2  
 A: dakara hokantokoroe itte tabetemo iizyanai kantanna soseezitokane=  
 B: hnhnhnhnhn=  
 同意して

- S P 2 S P 3」 「 S P 3  
 「S5 S5」 「S6  
 6)  
 1 2 3  
 A: #aruiwa tyoto# kantanna ano= hosiniku mitainano toka↑↓  
 B: hn soone zya maeno  
 #早く 小さく 大きく  
 うなづく (B)

- S P 3 -

-S6-

7)

(1) 2 3 4 5 6 7

A: hn= maenohiwa aiterudesyo 1 tabun sanzyuunitiwa

B: hini=1 ↓ maenohi tabun= hnhn #gozentyuudesyo#  
#うなずく

- S P 3

S P 3」

-S6

S6」

8)

(1) 2 3 4 5 6 7 8

A: \*hn hn hn #x x#\* dakara gogo= yo=isiyoka #hn ne ↑ #

B: dose\*yaruto sitemo ge=tenoho\* gogo yarima#syo=ka hn= hnhn#

\*同時発話 #hnと同期リズムで #両者うなずく  
うなずく

「 S P 4

S P 4」

「S7

S7」

「別局面 : A

5:A

9) 1

L1 2

3 4:B

AA: sositara= (..) uenai teidoni hh

hh=n sorenisa= sokode

BB: hutukadakarane= #hutukade=#

小さく

笑う

小さく

小さく

#独り言のように

#### 4. 目立たない目前の差異

##### 4.1. 問題点

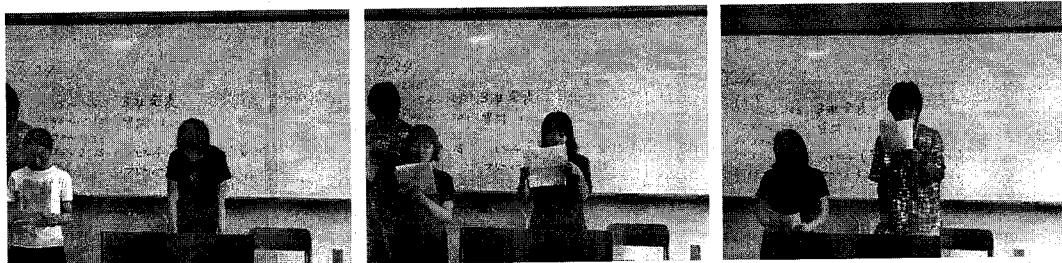
この章では上で見た個人宅における親密な知人間の歓談と相談の混合形態ではなく、大学での演習の性格を持つ講義というパブリックな場所での相互行為の事例を観察する。上の章で見たタイプの共同参加事例は、筆者が指導した卒業論文を含む様々な調査でも既に指摘され確認されている。研究調査に記録された私的場面では、もちろん日本人学生も極めて雄弁であり、おしゃべりを楽しむ快活な人物として登場する。一方で、これも良く知られているし、「シンポ報告」の所収論文「教室の異文化」（ライネルト2001）では、極めて微細に、いわば「ピンポイント」様に指摘されているが、日本人学生は授業の場では非常に消極的で明快な態度を示さないとされている。パブリックなコミュニケーションの場としての授業を少しでも活気づけるために我々も様々な工夫をしてきた。ここで資料とし、一部紹介するのは留学生と日本人学生が場合によっては混成グループで発表を行い、その後質疑をする形式で行われた講義（「日本社会論」、2000年1学期開講、山本恭子氏担当）である。

日本人学生は単に無動機に消極的なのではなく、見かけ上の消極性や態度保留は彼らの制度的な場面の理解に起因することが知られている。専門として異文化理解や国際コミュニケーションに興味を抱く学生達は、やはり彼らなりに遅速の差はあれ、より開かれた「パブリックな」行為形式と視点を獲得しつつあることを先の論考で示唆した（丸井2001）。この歩みをできるだけ加速するにはどのように授業の相互行為を組織するかというのが遠い目標であり、さしあたりは、彼らが実際の所どのように行動している（していない）かを承知する必要がある。以下では記録資料を用いて、まず既に始まっているが、しかし未だ萌芽的な「公衆の前の自分」への道を眺望し、次に、目立たない差違及び当該場面では自然であり、また理解にも困難を感じないが、日本人学生達とは明らかに異質な留学生の表現を対照的に観察する。

##### 4.2. 公衆の前の自分

非常に単純な事実から始める。上で述べた講義の最終日は発表のため延長されており、録画記録は約140分である。このうち日本人の2つのグループそれぞれ7-8名ほどが発表と質疑に費やした時間は90分で、発表が長く質疑は極めて短時間である。既に教歴もある年長者を含む3名の留学生（オーストラリア2名、合衆国1名、いずれも女性）が行った比較的短い提示と長い質疑とが50分間弱である。単純な頭割りで計算してもかなり密度の差があるが、さらに、内容と無関係に、印象に残るような何らかの身体表現があったかどうかだけを荒く調査してみると、日本人2グループ関連90分では30件以下で、しかもこのうち年長の留学生が7件を占める。一方留学生グループでは50分ではほぼ50件である。但しこの中には、積極的な日本人学生の貢献も含まれている。いずれにせ

画像4 a / b / c /



よどちらが活気ある場面であったかはこれだけでもある程度は理解できる。

問題は「公衆の前の自分」の像であるように推察される。典型的な画像を見ていく。

これらはいずれも発表する学生達で、おそらく無意識にであろうが、公衆の前の自分に対する自信のなさ、そのような自己のイメージへの違和感とその姿からにじみ出ている。発表者は交替するがこのような場面が数十分続く。聞き役の子生達も指摘に値するような動きはしない。彼らが十年以上に亘って学校という制度の中で習得してきた「身の置き方」である。一方、多数の聴衆の前で行動する経験を積んだ教師は以下のような明確で安定した姿を示すことができる。

画像 5



現代日本で社会化過程を終えた者には何の不思議もない事実であり、冗長な指摘と思えるかもしれない。が、このような学生達の姿が全く自然ではなく、むしろいたたまれない、硬直的で異常であると感受されることがありうる。そしてなによりその感受の内実が想像できるか否か、そのような視点の存在が想像できるか否かが、異文化適応の極めて重要な分岐点となる。そういった可能性に気づかせるためにも、このような発見法的な授業形式はとりあえず最初の一步となる。教育実践については奥村2001の大学間共同作業の報告も参照されたい。<sup>(注2)</sup>

#### 4. 3. 身体表現とその意義関連

##### 4. 3. 1. 積極的な参加者

前節での指摘にも拘わらず、意欲的で既に安定した参加の様態を示す学生も見られる。次の画像にある学生は、明確に自己の意見を述べ、発表者の見解を問い、内容的に実質のある対話を組み立てることで授業に貢献することが出来ている。

画像 6



ただし、当の日本人学生がそれなりに明快な行動の様態を示しているが故に、ここでは非常に興味深い文化間の差が観察できる。左の画像にあるように質問された年長の留学生（オーストラリア出身）は、質問者との対話を通じて終始相手の方を向き、また相手に視線を固定させているが、日本人学生は時折にしか相手を見ない。以下の画像7のように全く視線も体勢もそらしてしまう時間が短くはない。英語などヨーロッパ言語の文化圏では、このような「向かい合い」の保持が相互行為としての対面談話における相互性、より厳密には当事者性（誰と誰がその出来事の当事者であるか）の確保に対して重要な機能を果たすことが知られて

いる (Streeck/Knapp 1992)。つまり相手との相互行為過程に留まっていることを示すには、体勢や視線の保持を始め、様々な手順を実行し続けることが通常とされる。「手順指向」あるいは「手続き指向」と名付けることが出来る原則が働いている。この点で日本語文化は「与件指向」が顕著で、一度確立した相互性（「向かい合い」）はその後しばらく有効であるとするのが通常である。この事例は日本での場面なので目立たないが、ヨーロッパ諸語の文化圏では場合によっては違和や誤解の原因となりうる。（この問題は別の留学生発表者に対する質問への回答の中で、極めて違和感の大きな事例として紹介されている事例に関連する。以下のセクションで取り扱う。）

さらに特徴的なことに、彼は自己の意見を述べ、その発話に伴って明らかな身体表現（腕と手による話題のポイントを指摘し強調する身振り）を行ったおよそ唯一の学生参加者であるが、まさしくその積極的な表現行為の際に、相手への向かい合いが（英語の母語話者から見れば）放棄されている。（画像8）

一方、同じ学生が日本語文化で一般的な相手の同意を誘い出す「うなずき」とプロソディー上の手段（最終母音の引き延ばしとその直後の休止）を用いた際、相手の留学生発表者はこれに対して、ほぼ日本流にうなづくことで反応している。当の留学生の異文化適応はかなり進んでいると見る事が出来る。以下の画像9では両者が相前後してうなづく動作は再現されていないが、他の画像より向かい合いが緊密であることは観察できる。これは上で述べた相互行為の成立に関わる基本的な相互性のレベルではなく、その成立を前提とした日本語文化流の共同参加の形式（対決としての対話ではなく共にする共話）に関わっている。その意味でも当の留学生の習熟度、異文化への適応度は高いと判断できる。

最後に発表者の留学生が明確に質問者に向かって自己の体験を強調的に提示する箇所を掲げる。「向かい合い」がこのような形で実現され確保される。（画像10）

#### 4. 3. 2. 当事者とは誰か

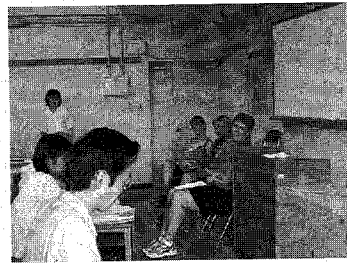
次の事例は留学生発表者に対する日本人学生からの質問とそれに対する返答の場面である。質問は相手を特定せず三名に向けられている。留学生の一人が自発的に返答を始め、他の留学生達も関連の事例を挙げて返答者をサポートしている。この留学生の返答の内容をまず紹介し、返答者の発話行動に見られる非言語表現の特性を考察しよう。

「はっきりと言わない」などの例を挙げて、日本人についてどのような印象を持つかと問われた留学生（オーストラリア出身、白人）がまず第一に挙げたのが、自分が日本語で話しかけたにも拘わらず、相手の日本人が連れ合い（日系合衆国民）に返答することが度重なるという体験である。英語が出来ないなどの理由で自信が持てず、逃げ出すのではないかというコメントが別の留学生からも発せられる。いずれにせよ返答者はこれを非常に奇異なことであると考える旨を述べる。（筆者も複数のヨーロッパ人から日本における同様の体験談、及び同様のコメントを聞いている。）

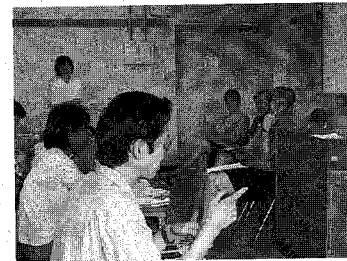
国際化が称揚されているにも拘わらず、外見の異質性に対する耐性は未だこの程度である、なんというひ弱な同質性指向だ、とも言えるが、より大きな問題になる可能性があるのは、「当事者は誰であり何をするのか」についての観念が文化間で同一でないことである。

一般にある人物が他の人物に明確な言葉と身振りで働きかけると、相手は、少なくとも当座は、否応なく相互行為の出来事に巻き込まれる。当事者であることになる。巻き込まれた方は、その後直ちに当事者であることを拒否する旨を示すことも出来る。ただしここからが文化間で異なるのだ

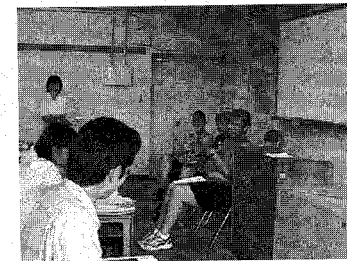
画像7



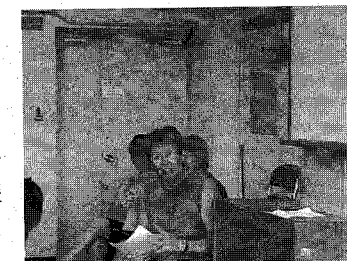
画像8



画像9



画像10



が、例えば多くのヨーロッパ言語文化圏では、拒否するならするで誤解の余地がない明確な態度を示す。つまり無言でかつ顔を急激にそむけるなど拒絶の身振りでその場を立ち去ることも稀ではない。(例えば駅のホームで物乞いに話しかけられる場合など。)逆に当事者であることを受け入れるなら、これにも相応の手續きがある。例えばヨーロッパでは視線の固定や向かい合いの確保であり、とりわけ重要なことは即座の応答発話である。その際使用される言語自体は問題でないこともある。筆者はドイツで、イタリア人の老婆とドイツ人の肉屋が互いに自己の母語で話し合っているところを目撃したことがある。豚肉の買い物は滞り無く終わり、彼の地ではこのようなことはもはや異文化接触でさえないように見て取れた。一方日本人が7000人ほど居住するドイツのある都市での体験では、商店の陳列ケースの前でしばしば日本人の主婦を救ったことがある。せっかく列に並んで自分の順番になったにもかかわらず、自分が当事者であることを発話を通じて確立出来なければ、用はないのかと相互行為はうち切られる。そういう理由で店先に立ちすくんでいる女性を時折見かけた。事情を聞いて買い物を手伝ったことは再三である。即座の発話を通じて私が当事者なのだと示せ、という要請は彼の地では日本よりはるかに強いようである。話しかけた人物ではなくその連れ合いに返事をするのは言語道断であると感じる人々がいても不思議はない。

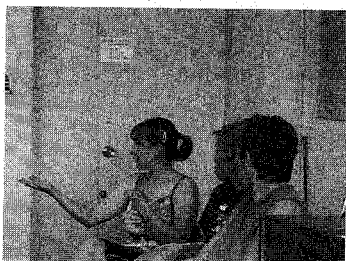
当事者性は限定的であり得るし、緩くもありうる。場合によっては、日本でのように同席の第三者に拡大・投射することも出来る。ドイツ語圏に研修旅行で家庭滞在する日本人学生達について、宿泊先のドイツ人から時折発せられるコメントに次のようなものがある。

「投宿中の二人の日本人学生の内一人に向かって問うと、自分には返答せずにもう一人の学生と日本語で話し始めるが、気分の良いものではない。私は無視された。」

第2章でライネルトの研究を紹介した。なぜ日本の大学で働く欧米の教師が、悪意がないにも拘わらず、日本人学生を否定的に評価してしまうのか、その理由の一端がこのような当事者性に関する観念の差違の中にある。授業中に話しかけられたら、隣の同級生の助けを借りて正しい答えを探すより、まず何はさておき相互行為の当事者であることを果たす手順を実行せねば、文字通り「話しにならない」わけである。我々が見るところ、英語圏ドイツ語圏に比べて、日本語文化では当事者性の限定は緩く拡大・投射も制限が少ない。どちらの仕組みが良いかという問いは無意味である。差違の事実を確認するだけで十分である。

日本人参加者の問いに返答した留学生の身体表現もこの意味で特徴的である。画像11で話者は「私から話しかけたのに」という発言をしている。右腕全体が自分側から発して仮想の相手に及ぶように動かされており、左手は自身を指している。「あなたとわたし」が当事者であることを明示している。

画像11



最後に同じ話者が見せる別の身体表現を紹介する。ここで話者は話し始めの不安定さから抜け出して、語るべき話題の核心を具体物のように捕まえたともいう手つきをしている。話題とその提示に確信が持てることは、話者としての責務をより良く果たすことにつながる。話者は相互行為に対してより積極的、協調的であることを示すことができる。(画像12)

さらに画像では示せないが、この手つきはそのままの形でリズム化されて動き、発話の実行を促進する機能をも果たしている。上で紹介した積極的な日本人学生の手動きにもやや小規模ながら類似の機能が想定される。言語によるリズム(プロソディー)



般)の差違を考慮する必要があるだろう。

## 5. 展 望

いわゆる「欧米人の大げさな身振り」は余分な付加物ではない。「大げさ」でない身振りはもっと意味深い。一見些細な日本語発話の「ふふ」は重要な意義と結びついている可能性がある。それらは当の行為主体達にとって、相互行為の通常性が確保されるために不可欠な手続きの一部をなす。

第4章で取り上げた事例に関して再度省みると、目立たない目前の差違に日本人学生達は気づいたのだろうか。授業後に提出された34通の感想のうち留学生の発表に関わるものは2通だけであり、ここで取り扱った問題は触れられていない。書かれた資料が配布された他の発表については多くの感想が寄せられている。学生達は文化的背景を異にする参加者からなる授業という相互行為の出来事で当事者たりえたのだろうか。そしてどの程度？これは研究事例となった当該の講義に対する消極的評価ではない。我々の教育的実践に対する省察、その共同作業への呼びかけである。異文化適応に関わって、授業の相互行為はどのように組織されるべきか、というのが共通の問いである。対象はこの類の講義に限定されない。いわゆる外国語授業にも、あるいはそこにこそより多く関わる問題である。

テーマを明示する身体表現は英語文化では、中国語文化では、別の言語文化ではどのようなものなのか。話を始める時に言葉と身振りはどのように協同するのか。およそ相互行為を拒絶するにはどうするか。どこで言語表現の発話が不可欠であり、どこではそうでないのか。どの場合に言語表現はむしろ不適切なのか。理論的には相互行為の生態論的な把握が要請され、実践的には我々の異文化適応体験を反省し、より緊密に組織することが望まれる。

注（本論考では文献指示や関連の注釈的記述を出来る限り本文テキストに統合した。これに属さないもののみ以下に掲げる。）

- 1) 研究資料の収集整理に貢献した知名誠、池川玲子、山崎夕紀子の各氏に感謝する。また一々名前を記さないが、海外や日本で録画記録に参加された大勢の方々にも感謝の言葉を述べたい。
- 2) 丸井(2001)でも指摘したが、異文化というと「外国旅行」というのは日本の習俗的観念である。奥村の試みは高知と長野という日本内の地方性を軸に、非常に開放的な学生の自主作業を促進する試みである。

## 文献表

Bublitz, Wolfram : Supportive Fellow-speakers and Cooperative Conversation, Amsterdam, 1988

Gumperz, John : Discourse Strategies, CUP, 1982

Koechlin, Bernard : Prolegomena to the Elaboration of a New Discipline: Ethnogenetics, Poyatos, F. (ed.), Advances in Nonverbal Communication, 59-76, John Benjamins Pub. Co., 1992

丸井一郎：「異言語」としてのドイツ語、西田越郎先生記念論文集、234-245, 1985

画像12



- 丸井一郎：談話の相互行為的基盤と「協調」の概念、『ドイツ文学』88号、89-100, 1992
- 丸井一郎：異文化間相互行為理論の基礎 -文化とコミュニケーション-, 人文科学研究 (高知大学人文学部)、第6号、125-147, 1998
- 丸井一郎：基調報告、『シンポジウム「異文化適応と言語教育」の報告』、高知大学人文学部国際社会コミュニケーション学科、4-8, 2001
- 丸井一郎：異文化適応教育の諸前提。(研究プロジェクト「異文化適応教育の充実」成果第2部)、国際社会文化研究、第2号、高知大学人文学部国際社会コミュニケーション学科、25-49, 2001
- 丸井一郎、奥村訓代、金和蓮：異文化性と教授方策-非言語表現を素材に-, 高知大学学術研究報告、第49巻、9-29, 2000, (=丸井他2000)
- メイナード、泉子、K. : 会話分析、くろしお出版、1993
- Maynard, K. Senko. : Japanese Conversation, Norwood, 1989
- 大浜るい子：日本語教育におけるあいづち指導のために、『シンポジウム「異文化適応と言語教育」の報告』、高知大学人文学部国際社会コミュニケーション学科、37-43, 2001
- 奥村訓代：「日本事情」一つの新しい方向性 -国際化教育の旗手として、「国際社会文化研究」第1号、53-70、2000
- 奥村訓代：異文化共有論、凡人社、2000 (教材)
- 奥村訓代：信州大学との異文化間交流記録、2001
- Quasthoff, Uta. M. : Prinzip des primaeren Sprechers, das Zustaendigkeitsprinzip und das Verantwortungsprinzip, In Ehlich, K. et al. (Hgg.) "Medizinische und therapeutische Kommunikation", 66-81, Opladen, 1990
- Reinelt, Rudolf : The delayed answer: Response Strategies of Japanese Students in Foreign Language Classes, The Language Teacher, XI, 4-9, Tokyo, 1987
- Reinelt, Rudolf : 授業の中の異文化、『シンポジウム「異文化適応と言語教育」の報告』、高知大学人文学部国際社会コミュニケーション学科、44-47, 2001
- Roth, Wolff-Michael: From Gesture to Scientific Language, Journal of Pragmatics, Vol. 32, No. 11, 1683-1714, 2000
- Sacks, H./Schegloff, E./Jefferson, G. : A simplest systematics for the organization of turn-taking in conversation, Language 50, 696-735, 1974
- Schiffrin, Deborah : Discourse markers, CUP, 1987
- Schneller, Raphael: Many Gestures, Many Meanings: Nonverbal Diversity in Israel, Poyatos, F (ed.), "Advances in Nonverbal Communication" , 213-236, John Benjamins Pub. Co., 1992

Schwitalla, Johannes : Über einige Weisen des gemeinsamen Sprechens - Ein Beitrag zur Theorie der Beteiligungsrollen im Gespräch, Zeitschrift für Sprachwissenschaft, 11,1, 68-98, Vandenhoeck und Ruprecht, 1993

Streeck, Juergen / Knapp, Mark L. : The Interaction of Visual and Verbal Features in Human Communication, Poyatos, F(ed.), "Advances in Nonverbal Communication", 3-24, John Benjamins Pub. Co., 1992

ガトラウスキー、P. : インターアクションの社会言語学、「日本語学」、第13巻10号、40-51,1994

田中每実 / 鷹尾雅弘 : 制度化と相互性 - ホスピタリズムとその一事例に関する人間形成論的研究、愛媛大学教育学論集、第13号、1-14, 1991

平成13年（2001）10月3日受理

平成13年（2001）12月25日発行

